

映像と語りで知る「自治基本条例ってなあに」

ナレーター、アイ、裕次郎、幾、ケーキ屋さん、先輩、の6人の配役を決める。または幾とケーキさんは1回だけなので、二役をして4人または5人でも可能。

映像にあわせて脚本を読む

「越谷市の名物」の部分のセリフは各地区に合せた内容にする。すなわち13通りになる。

場面1.

ナレーター：神田アイは大学に入学するために、越谷市に住む祖父の神田裕次郎の家に住むことになりました。上京したアイを裕次郎が南越谷駅に出迎えました。

アイ「わー、越谷って意外に都会なんだ」

裕次郎「そうだなあ、6万人が乗り降りする駅だからね。隣の駅は『越谷レイクタウン』という新駅なんだよ。埼玉県東部地域の中核的な都市なんだ。」

ナレーター：越谷市は日光街道の宿場町として発展してきましたが、地下鉄日比谷線が東武伊勢崎線に乗り入れした昭和37年ごろから飛躍的に人口が増え、東京のベッドタウンとして、ついに32万人の街になりました。今年には町から市になって50年です。街のほぼ中央を南北に東武伊勢崎線が走り、商店街は駅周辺から発達しました。近年は駅前マンションが増えています。しかも、駅から1、2キロ離れれば田畑があって緑も残っています。川が5つも流れていて、都市に残る自然空間となっています。市役所辺りを流れる元荒川べりでは四季折々の花が楽しめます。

場面2.

アイ「明日から私は北越谷の大学まで自転車で通学するつもりだけど、越谷の名物は何なの？」
裕次郎「いろいろあるが、私は南越谷の阿波踊りをあげたいね。23年前にある企業が始めた阿波踊りが57万人もの人を集める大イベントになったんだよ。」

越ヶ谷「いろいろあるが、久伊豆神社の例大祭りは古くあるお祭りで由緒ある山車が旧日光街道を久伊豆神社に向かう様子は時代絵巻のようだよ」

桜井地区「新しい住民が多い街だけれど、獅子舞や虫追い行事の江戸時代から続く農村の伝統行事が続いているよ。」

以下、各地区に合わせて名物やイベントを語る

ナレーター：祖母の幾が口をはさみました。

幾「私は宮内庁の鴨場ね。深い緑の中に特別な堀が掘られていて、網でカモをとるそうよ。外国の首脳や皇族の方々が使われているけれど、特定の期間には市民にも開放されているわ」

裕次郎「人造湖のあるレイクタウンは大きなスーパーもできて、これからの10年間で2万人の人たちが住む街になるし、大袋では区画整理がなされて新しい住民が1万人以上すむことになるらしいね。越谷はまだまだ人口が増えていく若々しい街なんだよ。」

場面3.

ナレーター：今日は朝から裕次郎さんは地域のコミュニティ推進協議会が主催するフェスティバルに役員として出かけました。裕次郎さんは自治会の役員をして近所の人から頼りにされています。越谷には自治会のほかに地域のPTAやスポーツ少年団、子ども会、青少年育成協議会などの地域に根付いた団体が結成したコミュニティ推進協議会が13あり、地域活動を行っています。各地区ごとの企画によって環境やレクリエーション、防災・防犯などのイベントに大勢の人が参加します。また、市内にはさまざまなテーマで社会貢献活動をする市民団体が150近くあり、活発な活動をしています。

幾「私がボランティアをしている市民団体は、まちのバリアフリー化に熱心で、もう20年前からバリアフリー調査をして、鉄道会社や行政にバリアフリーのまちづくりを要望しているのよ」
裕次郎「そうそう。小学校で土曜日に子どもたちに遊びの場を提供している市民団体もあるね」

場面4

ナレーター・アイは自転車で大学のある北越谷に着きました。駅前西口の商店街は電線も地中化されていてきれいです。ケーキ屋さんのウィンドウになにやら写真が飾ってあります。

ケーキ屋さん「素敵な写真でしょ。近くの大学の学生さんたちが、『まちかどを美術館に』っていう活動をしていてその一つなのよ」
アイ「それって、もしかしたら私の大学の先輩かしら」
ケーキ屋さん「きっとそうよ」

ナレーター：ケーキ屋さんの角を曲がると今度は「地場野菜」と幟をたてたお店がありました。主婦たちが地元の農業を活発にするために地元農家から野菜を仕入れて売っている店です。橋を渡ったたら、川の清掃をよびかける市民団体のポスターがはってありました。
アイ「なんだか越谷って元気な人たちがいっぱいいるなあって感じ」

場面5

ナレーター：大学に行ったアイは「まちかどを美術館に」という活動をしている先輩にいろいろ話を聞きました。先輩はその活動だけでなく、「越谷市自治基本条例審議会」の委員をしているそうです。

アイ「えっ—学生で審議会の委員をやってるんですか」
先輩「公募制だったので応募したら選ばれたのよ。それで一生懸命、自治のことを勉強し始めたの」
アイ「でも、いったい、自治基本条例ってなんですか」
先輩「一言でいうと『越谷市の憲法』っていえるわね。新しい時代にあったまちづくりをみんなでするために基本的なルールを決めるものなのよ。8年前に地方分権に関する法律が施行されて「地方自治の時代がやってきた」なんて言われるようになったけれど、それを実現する一つの手段ね。でも、アイさん、「地方自治」とか「地方分権」がなぜ大切だと思う？
アイ「うーん、よくわからないけれど、夕張市みたいに「倒産」する自治体が現れたでしよう？それが関係しているのかな。」
先輩「そうね、国からもらう税金、つまり『地方交付税』に頼ってばかりいたら、国が出さなくなったら倒産してしまうよね。調べたら越谷市だって平成12年に90億円の地方交付税をもらっていたけれど、19年度は大幅に減って12億円になっているの。びっくりしたわ。もちろん、国税である所得税は下がり、市民税は上がって、市に税金が入る「税の委譲」も始まってはいるけれど、私たちも市の財政のことを考えていかなきゃと思ったわ。でも、地方自治を進めなければならぬ背景はもっとあるの。アイさんは何だと思う？」
アイ「うーん、後期高齢者医療制度が取りざたされていますよね。うちのお祖父ちゃんやおばあちゃんは元気だけれど、高齢化が越谷でも進んだらどうしたらいいのでしょうか？」
先輩「そうよね、少子高齢社会が進むと子育て支援や高齢者問題をどう地域で解決していくかが問われるね。福祉、教育、医療分野はもともと自治体が担ってきたけれど一層、その行政運営が問われるってわけよね。」
アイ「そうか、これからは自治を上手に行って充実した地域社会を作り上げていく自治体と、そうでない自治体がでてくるんだ」
先輩「でも、それは行政の責任だけじゃあないよね。行政のトップである市長は市民が選んでい

るし、それをチェックする議員も市民が選んでいる。市民の役割が増してくるわけよね。市民は選んだからあなたしっかりやってね、とおまかせにするだけでなく、自分でも動かなくては街は良くならないことがしだいにわかってきたのね。だから、これまで作られた他の市の自治基本条例の中には必ず「参加」と「協働」が入っているわね。」

場面6

アイ「『参加』と『協働』って、よく聞く言葉だけれど、実際はどういうことなんですか。」
先輩「たとえば、ゴミの分別を行政がこう決めましたから、皆さんお願いします。というのではなく、決める前の段階から市民の意見を聞いてやり方を考えると、広場づくりをするとしたら、設計後ではなく設計前に市民の意見を聞いたりすることを「参加」といっているわね。そのためには行政は情報公開を積極的に行い、市民も意見を持ち、話し合いの場をつくりお互いに聞く耳をもって理解し合うことが前提になるわね。」

アイ「じゃあ、協働はどういう意味ですか」

先輩「『協働』は『参加』よりもう一歩進んだ段階とされているわ。たとえば高齢者がおしゃべりをしたり情報交換をするサロンが地域にいっぱいあったらいいと市民が望んでいるとするわね。でも、行政には人手がなくて実現できない。そうしたら市民が人材を提供し、市が場所や経費を提供すれば実現できるわね。こういった市民と行政が共通の公益的な目的のために一緒に行くことを『協働』と呼ぶのよ。つまり、市民から見れば『参加』と『協働』で自分たちの望む地域社会をつくることができる。つまり、「自治」を推進できるってということなのよ。」

アイ「そうなんだ。自治基本条例が必要な背景には国や地方の財政難と少子高齢社会があって、それを乗り越えるためには、市民の参加と協働が必要だということですね。」

先輩「それにもう一つの背景があると思うわ。地域の連帯や助け合いが薄れてきたことがあげられるわね。つまり、コミュニティがうまく働かなくなったのでは、という危機感よね。インターネットで世界中の情報が取れるようになったけれど、隣の人と挨拶もしないということはないかしら。」

アイ「うーん、なんだかありそうですね。」

先輩「だから、そうした薄れてきた地域の人間関係を復活させたい、特に地震などの災害時に必要な助け合いの力を高めたいという思いも自治基本条例の中に入ってくると思うわ。」

アイ「そうなんだ。でも、どうやって地域の力を取り戻したり、築いたりできるんですか」

先輩「難しいけれど希望もあるわよね。自主的に社会活動に取り組むボランティアや市民団体が増えてきているよね。そういう団体が新たな人間的な関係をつないでいく動きがあるわよね。」

アイ「それにおじいちゃんのように地域でがんばっている自治会や団体もいますよ。なくてはならない存在ですよね」

先輩「行政にも頑張ってもらわなくてはね。行政改革も必要なの。市民も行政も議会も、みんなて手を取り合って、行動していかななくてはならないのよ。まさにその最初のルールを表すのが自治基本条例なのよ。今、越谷はまちをつくっていくターニングポイントの時期なんですよ。だから、みんなと一緒に考えていきたいと思って、委員に応募したわけよ」

場面7

ナレーター：先輩の熱い情熱に触れて、なぜ、今、自治基本条例づくりか、納得したアイでした。大学をでたアイは、桜並木と蛇行する元荒川が一望できる橋で立ち止まりました。大きな夕陽が今日一日の最後の光を赤々と放っていました。

「結構、いい街にしていけるかもしれない、越谷は」とアイはつぶやいていました。